

夢洲の花火を巡る狂騒曲

く協会、初めての共同声明を出すく

写真文

加賀まゆみ(理事)
夢洲調査グループ



今年もコアシサシがやってきた。5月3日、夢洲上空にコアシサシの群れが飛び回っていた。

2021年2月9日、「5月4日に夢洲でイベントをしますんでよろしく」という一本の電話。万博応援の実行委員会を名乗り、内容はまだ発表できないという。すぐ大阪港湾局※に電話をかけた。イベントは花火らしいとのこと。悪い予感が的中した。(※昨年は大阪市港湾局だったが、現在府市合同の大阪港湾局に組織変更。以下港湾局と表記。)

夢洲では昨年のちょうどこの時期、コアシサシの大集団が繁殖行動をしていたものの、連休後工事再開とともにいなくなってしまった。それから何度も港湾局と協議を重ね、今年の繁殖誘致エリアを確定した矢先のことだった。この時期はともかく静かにそっとしておいてほしい。

その実行委員会(以下花火側と表記)に何度も連絡するが、報道発表するまで待つてとのこと。詳細不明のまま、イベント中止の要望書を出すため、花火の影響の有無を調べるが、この時期の花火大会も繁殖地付近でのイベントも事例がなく、大丈夫か否か誰も答えを持たない。大阪市・警察・消防などに夢洲に関わる許可

関係の情報開示請求しつつ、繁殖期の夢洲でのイベントを避ける要望書などを準備。最初に相談した環境省は3度めの電話でやっと花火側から事情を聴く日を調整中という返事。

2月16日報道発表は気づかなかったが、翌日そのイベントの公式サイトを見つけた。「医療従事者への感謝とコロナで亡くなった方への鎮魂」という大義名分を謳い、「昨年の中止で使われなかった全国の花火45,000発を集め、800機のドローンと前代未聞のスケール!」。24日には鑑賞チケットの前売りまで始まった。これでは動き方を間違えると世論を敵に回す。私は途方に暮れ、思わず「助けて!」とつぶやく。なんとそこから予想外の展開が始まった。

以前から夢洲のコアシサシのことを気にかけてくれていた何人かが、自然保護団体連名で共同声明をだしたらどうか?と提案してくれたのである。環境省の事情聴取の予定は3月4日。声明を出すならその前だ。6日間の猶予しかない。特に日本自然保護協会と山階鳥類研究所の関係者には声明のコンテンツ制作から他団体紹介まで、昼夜問わず多大なご協



4月11日、誘致エリアにデコイ・シェルターなどを用意した。



デコイは手分けして色塗りをした。野鳥の会事務所にて。



本物そっくりのデコイ。遠目には本物との区別が難しい。



こちらは本物のコアシサシ(5月9日)



雨が溜まってできた池で気持ちよさそうに水浴をしている。(5月9日)

力をいただいた。ただ担当者の共感 は得られても、団体合意に時間切れ となったところも多かった。

3月3日、午後3時声明発表。当協会と「日本野鳥の会」「日本野鳥の会大阪支部」の3団体に加え7団体の賛同をもらうことができ、HP発表と同時に、環境省・港湾局・花火側・報道各社にメールで伝えた。

3月4日、環境省の担当者から「花火側には声明文を見せ、この件は大阪の一団体からの申し入れではなく、全国の自然保護団体が注視しているということを認識してほしいと伝えた。この席での港湾局担当者の説得は心打たれるもので、花火側もかなり考え込んでいた」という報告電話をもらった。その後も私たちは報道各社を集め、オンラインで共同声明説明会を開いたり、SNS発信などに力を注いだ。

3月7日、花火側から呼び出される。そして花火の計画図面を渡され、100m遠くへずらしても無理か?変更するならいつなら可能か?と聞かれる。もう2か月を切っている。彼らもすでに多額の資金を投じ、計画の見直しするにはギリギリ。私たちは「い

のち輝く」という万博の理念を守るためにも共同声明の通りで、と重ねてお願いした。

3月11日、「変更後の日程が決まらないので公表はまだできないが、5月4日には実施しない」と花火側から電話がくる。花火公式サイトからは「5月4日開催」の文字が消え「日程は近日発表」にかわった。3月15日、協会事務所に実行委員長らが来て8月での開催に向けて手続き中との正式な報告があった。この日は和気藹々と、しかし協会側からは「渡り鳥は生物多様性の指標になること、それは持続可能な社会の基礎となること、国際社会は有害物質を環境に放出しない花火へ向かっていること」など話をさせてもらった。

花火を巡る怒涛の1か月余は、こうして私たちの願った形で着地した。この活動に協力・支援くださった皆さんの皆様に、心から感謝したい。またイベント延期と言う大英断を下した花火側にも敬意を表したい。

「この問題は花火をどうするかだけの問題ではない。万博そしてそれに続く跡地問題で、夢洲をどうい

場所にしていくなにつながっている。環境を大事にする市民団体の見識はこれから必要なもの。あなたたちもこのイベントの問題だけと考えずに、万博および夢洲というものを一緒に作っていくつもりで考えてほしい。」これは、3月4日の環境省事情聴取で港湾局の担当者が花火側を説得した内容だ。私たちは、行政側からのこの期待を裏切らないように、今後も自然環境ファーストで、ぶれない活動をしていきたいと思っている。

5月4日、静かな連休だ。新型コロナ感染拡大による非常事態宣言では予定された多くのイベントが中止になった。自然に配慮した花火実行委員会はイベントの直前中止という最悪の事態を、コアシサシに助けられたのかもしれない、と思う。

誘致エリアには、デコイ(コアシサシの人形)やシェルター、自動カメラなど、準備万端整えた。コアシサシはやってきた。でもまだ、落ち着かない。今年は桜は異常に早かったが、いつまでも寒い。あとは彼らがここを繁殖地に選び、無事ヒナが巣立ってくれるだけ。それだけを今は静かに祈っている。